

穢を捨て浄を欣う ～生活と聞法～

内田 信行

「穢を捨て浄を欣い、行に迷い信に惑い、心昏く識寡なく、悪重く障り多きもの、特に如来の発遣を仰ぎ、必ず最勝の直道に帰して、専らこの行に奉え、ただこの信を崇めよ」（真宗 聖典 149 頁）

1. 副講テーマ設定の背景と課題

○課題『私は宗教に何を求めているのか』

- ・ 昨年の誕生会の後、教行信証 総序について取り組むことになり、細川巖先生の講義録「総序について」をテキストとして、誕生会実行委員会メンバーによる読書会（2回/月）で拝読した。
- ・ 読書会に参加する自分と、会社や家庭での自分の思考や振る舞い/言動のギャップがあまりもかけ離れていることに気づき、どんどん違和感が増大していった。
- ・ 具体的には、「穢を捨て浄を欣う」ような心持で読書会に参加していながら、日常生活では全くそうではない現実（何をすべきか分からない、惰性の毎日）がある。
- ・ 日常生活の様々なモヤモヤを抱えながら読書会（たまに会座）に出させて貰っていたが、（かといって積極的に聞法する訳でもないが）「自分は何を求めて聞法しているのか」と問わざるを得なくなった。
- ・ 総序の文章を拝読している際に、「専らこの行に奉え、ただこの信を崇めよ」という勧め（？）に対して、「（個人的感想として）何かよくわからなくても頑張ってお念仏を申せ、信心が獲られるよう積極的聞法せよ」と言われているようで抵抗があり、細川先生の「積極的聞法（頑張らなくっちゃ）」というのは腑に落ちていないことが改めて問題になった。

2. 【問い】 私は何を求めて聞法しているのか

◎人間の実際生活上の諸要求のために「宗教あるにはあらざるなり」

(広瀬杲師 東本願寺「ともしび(※1)」より) ※1 <https://jodo-shinshu.info/2015/04/16/861/>

『パンの為、職責の為、人道の為、国家の為、富国強兵の為に、功名栄華の為に宗教あるにはあらざるなり。人心の至奥より出ずる至盛の要求の為に宗教あるなり。宗教を求むべし、宗教は求むる所なし。

それかくの如きが故に、修養は自覚自得を本とす。他人のこれを代覚代得すべきにあらず。(栄養もまたしかり。)』(定本清澤満之文集、396頁)

- 人間が当時生きていくうえに要請されてくる事柄を、よりよく実践してゆき、よりよく拡大していくことを目的として、宗教というものが位置付けられるならば、それは決して宗教ではない、と清沢先生は言い切られる
- 清沢先生によって否定された事柄(「宗教にはあらざるなり」)が、私たちの宗教感覚のなかで、実はいろいろな形に姿を変えながら作用しているのではないか。これを自分にいっぺん問わなくてはならない
- 『私は宗教に何を求めているのか?』
 - 「宗教とは何のために求めるのか?」と言ったとき、「人心の至奥より出ずる至盛の要求の為に宗教あるなり」清沢満之先生
 - 宗教は人間のどのような心根に応答すべくあるのか?
 - 諸々の人間の諸要求ではない
 - 人間を人間たらしめる根源的な願い、「至奥より出ずる至盛の要求」

- こうして生きている限り、人間の奥にある自我を中心としたどんな判断をも超えて、人間を生きしめるような、人間が生きることの真実を求めざるを得ないような、そういう「至奥より出ざる至盛の要求」が、私たちを突き上げている
- 問題は、その要求に気づくことができない。したがってその要求を明らかにしながら、その要求に対する正当な答えを人間に与えてくれる道、それがなくてはならない。(中略)「人心の至奥より出ざる至盛の要求」のためにのみ宗教はあるのである
- 「宗教を求むべし、宗教は求むる所なし」。人間のもっとも深いところから突き上げてくるような、もっとも盛んな要求を満たすために宗教というものはある。だから人と生まれた限りにおいて、人間としてこの世に生を受けた限りにおいて、「人心の至奥より出ざる至盛の要求」を満たす道を求めなくてはならない。それが宗教だと。だから宗教は、何かのために役立つ何物かではない。人間である限り宗教を求むべきである。

◎ 私たちの問うべき課題 (広瀬杲師 東本願寺「ともしび」より)

- なぜ私たちは宗教らしきものをたて、それに心ひかれてのめり込まれていくのか。
(中略) なぜ人間がそうになっていくのかを問うていくこと、それが今日一番尋ねなければならないこと
- 「穢を捨て浄を欣う」という文字に、私たちはもう少し心を寄せていくべきではないか
- 「穢を捨てる」という「穢」とは何であるか、「浄を欣う」という「浄」は何であるか。穢は「穢土」であり、浄は「浄土」であろう

- 人間はとにかく「穢」といわれる現実を廃捨して、「浄」といわれる領域を求めるということが、人間の根源の願いなのだ
- 「穢を捨て浄を欣えども、行に迷い信に惑い」と詠みかえて見ると、穢を捨て浄を欣っているけれども、その心によって求めていくが、結局その求めた宗教、いわゆる「行・信」、その行に迷い、信に惑うていく
- 宗教を求めなくてはならないような要求が、自分の関心を超えて突き上げてくる。ところが、その突き上げてくることによって求めたものが逆に、宗教を求めた心そのものを閉塞化していく。
- 「穢を捨て浄を欣え」という、その願いをどうしても満足させていくことができない。できないにも関わらず「やめる」というわけにもいかないで、さらにそれを求めていく。この一見悪循環とも思えるようなことのなかに、人間の一番大きな課題があるのであろう
- 「穢を捨て浄を欣う者、願うがゆえに行を求め、信を求めるけれども、求めたその行と信に迷惑をし続けている、そういう生き方をしている者よ！」とお呼びかけになるようにして、親鸞聖人は「専らこの行に奉え、ただこの信を崇めよ」とおっしゃるのだらう。
- 親鸞聖人は、「専らこの道を行じ、ただこのことを信ぜよ」とはおっしゃらない。何を行ずるか、何を信ずるかということ、ここでは問題になさらない。人間が、

私が、皆様方が、「専ら奉える」ような行。ただそれに帰一する、信ずることのできるような信。それを明らかにせよ、とおっしゃる。

・「奉える行」「讃える信」ということは、行と信とを獲るということで止まるんじゃないんだ。自分の全身、自分の全霊をそこに賭けて自ら讃える行。ただひたすらに仰ぐ信。そういう行信に出遇い、それに出遇うことが実は浄土真宗なのだと、親鸞聖人ご自身のお気持ちの中でお確かめになって、そのことを「総序」のご文にお示しになったのだと領解します。

→ 何を信じてどう生きていけば良いのか。自分が腑に落ちるものを常に探し求めている。一丁あがり、わかったと言いたい。

3. 細川巖師「総序について」を改めていただく

◎後序から見た総序の内容

(後序より)

「竊かに以みれば、聖道の諸教は行証久しく廃れ、浄土の真宗は証道いま盛なり」

(略) 行証と言えは教行証である。それが仏法。仏道というのは教行証で表わされる。教えがあって、その中に説かれている行、そのものが実際に実践されて、そこに証果を得る。それを証という。

仏道とは何か、仏の教えたもう道であり、また仏と成る道である。その仏と成るといことですね、仏と成るといのは証である。その仏となる教え、そして仏となる行、そしてそこに仏となる証、そういうものが成り立つ、それが仏道である。

◎仏道とは何か

仏道とは何か、それは出世間、世間を超えるのである。世間を超えるというのがよくわからん。わからんが出世間道というのである。教行証というのである。いかなる聖道門にせよ、浄土門にもせよ、その証とする所は、その目標は出世間にある。出世間というのは何かというと、こういう中で結局小さな事に追い回されて、わずかな事でひっぱり回されながら、一生終わっていくしかない我々にもう一つ高い世界、それを越えた世界、それを如来の世界、一如の世界という。もう一つ高い世界だな、それに生きる。いわゆる世間を超えてですね。生きる、そういう道、そういう道を与えてくれるものをいわゆる仏道という。その内容を教行証と言うのである。

◎世間道を超える

世間道を超えるとは何か、大きな船があつて世間道の中につかっているけれども世間道を出ている所があるのだ。そこにこの生死海を渡るとい事が成り立つ。我々の現実はこの世間の中につかりきってしまったている。この中につかりきって溺れてしまっている者を、この船に、

「難思の弘誓は難度の海を度する大船」南無阿弥陀仏のその船は我々の世界を超えた大きな世界からの働きかけ、廻向、そしてそこから照らして下さる光明が、闇を破り我々を照らし出して超えるという事がある。超えしめる。世にありながら、世の中の小さな事も結構消化しながら、これを始末しながらですね。世を超える、世を超えしめる。そういうものを持っている。その時にですね、いわゆる生老病死、あるいは迷いから、そういうものから離れた遠く広い、そういう世界を考える力を与えられて、そこに人間としての在り

2024/09/21 誕生会

方、そして本当に我々が進むべき道、そういう事をですね。そういう事を考える、そういう世界を与えられるのである。

→現実の私は世間道を生きる者。世間とはある時間と空間と間柄をもつ。（今・ここ・こういう私。このような存在が世間的な存在であり、人間である）なかなか自由はきかず、いろんなことが起こってくるような業を抱えて生きている。

すべての凡小、すなはち世間道の中にまみれた、世間道の存在、小さな事からいろんな事を考えなければいけない。つまらん事に引っ張られている世間道の存在はすべて凡小。安田理深という先生は「世間道の人の名前を凡小という」といわれている。どんな大人物も世間道の中に置いたらみんな凡小となる。

◎教行証の成立

（親鸞聖人は）何を明らかにしようとされたか、それは浄土真実の教行証ですね。これを明らかにしようとされた。教行証という所にいわゆる仏法の具体的内容がある。いわゆるその教えの中にこもる行、示されている行を本当に頂いて、そこに世を超える、すなはち仏となるそういう道に立つ、その教行証という所に仏道がある。

仏道というのはいわゆる教え、教えだけでは仏道ではない。我々にとってその教えだけでは仏教ではない。それは単なる教えであって、それがわが身に成り立つという事がなければならぬ。教行でなければならぬ。仏教であるためには教行がなければならぬ。それが実践され、わが身について行われていくというものでなければならぬ。

しかし、教行だけでは仏道に成らない。それは必ず証がなければならぬ。証の成立ということがなければならぬ。そこで教行証である。

（中略）

2024/09/21 誕生会

証というのは何か、悟りですけれども証果と言います。それはいわゆる涅槃、一如、如来の世界を頂く事を証果という。その証果が得られるということが大事ですね。教行証が大事、そこで教行証を更につづめていう時には、教証と言います。仏教というのは教証でなければいかん。これが一番つづめた言い方です。もうちょっと広げて言うと教行証でなければいかん。行があつて証がある。もう少しこれを広げると教行信証となるのである。

広げるといふのはどういうことかという、そこからわけて出す。教証から教行証になるのはどうしてかという、それは教の中に、教の中から行を別開するという。教えの中身が行なのである。それが証を生んでくるのである。教証という。正信偈には「真宗教証興片州」といって法然上人の所に出ています。証が大事です。ということはこの証がなければ仏法にならない。

その教の中身を開くと行である。行の中身を開くと信というものが入っている。こういう事がどうして言えるのかという、それは南無阿彌陀仏であるからですね。南無阿彌陀仏が行である。行を開いて信が生まれるというのである。南無阿彌陀仏でなければ言えない。

そこで顕浄土真実の教えと言うものは、教行信証になるのである。要するに証が大事、教の中身が行、行が本当の行、真の行、すなはち証をもたらす、証を生む行、真の行は南無阿彌陀仏、すなはち如来である。

如来が届いて初めて本当の証というものが獲られる、世を超えしめる。世を超えて世間道を出るのです。出世間道、それは人間の力ではない。行でなければ出来ない。南無阿彌陀仏でなければ出来ない。そこにいわゆる行はですね、行が届いて信証となる。信証を生むのである。信証というのはいわゆる行信証と申しますね。我が身に届かないといけな

我が身に届く事が信証となる。信は信心、信心というものは必ず証がなければならぬ。信心というのはいわゆる南無阿彌陀仏が届いて生まれるものである。証を持たない信は単なる感激

2024/09/21 誕生会

である。信を持たない証は単なる観念である。信心というのはいわゆる教行信証という、信心という事が一番大事な宗教の問題ですが、その信心というのは南無阿彌陀仏が届いて生まれてくる。だから行を開いて行信とこういのである。

その南無阿彌陀仏が届いたかどうか、我々はどうにかしてそれを確かめたいと思う。それで非常に喜んだ、非常に感銘した。涙が出た。その時には本当に嬉しくて嬉しくてよかったというのはいわゆる。それだから私の信心は本当の信心だとも知れないが、そういうのは単なる感激である場合もある。

(中略) 単なる感激、そういうように喜んだからと言ってもだめ、証がなければいけません。証もそういう感激もなにもないような、私は助かったというのも観念的であって本当のものではない。信証だな、信証でなければいかん。

◎証とは何か

ならば証とは何か、証とは世を超えと言いますけれども、証というのはだいたい、大涅槃ですね。証は大涅槃、大涅槃というのは何かというと、それは大変な話して寂滅とか滅度とかいろいろ言われる。今大事な言葉は無為という事でしょうね、寂滅無為。無為というのはですね、はからいを離れた世界、それを無為と言う、法然上人は無義という言葉が愛された。

(中略)

どうしてこうなったのであろうか、そういうのを不審という。

それに対して「煩惱の所為なり」自己中心の私であって申し訳ない、これが本当の私、如来を忘れて右往左往しているのが、本当の私となる。それがはからいなしである。南無阿彌陀仏になる。それを証という。

2024/09/21 誕生会

証を持たないといわゆるはからいに終わる。はからいに終わってそれを出る事ができない。我々が本当に救われていくというのは、はからいなしという天地に出して頂く。それが証ですよ。それが一番大事なんだ。

そこで教行証を明らかにしたい。それをどうしても明らかにしたい。教えだけでは仏法ではない。教行として実行というものが私の身につかなければならん。だが実行だけではなく、もう一步証が成り立つことが大事である。証ははからいなしとなる事、それが本当に如来の世界である。はからいなしとは、これが本当の私とわかる事、それが一番大事なことです。

4. 『穢を捨て浄を欣う ～生活と聞法～』を考える

- 「穢を捨て浄を欣う者、願うがゆえに行を求め、信を求めるけれども、求めたその行と信に迷惑をし続けている、そういう生き方をしている者よ！」とお呼びかけになるようにして、親鸞聖人は「専らこの行に奉え、ただこの信を崇めよ」とおっしゃる（広瀬杲師 東本願寺「ともしび」）

→この生活の現実（世間道）から一步も出ることなく、少しでも良い自分になって、楽になりたいと願っている。そして聞法すればそうできると思っている

「龍樹の仏教 十住毘婆沙論」（細川巖著、ちくま学芸文庫）より

- 龍樹の『十住毘婆沙論』は、『十地経』の解釈ではない。「菩薩はいかにして誕生し、いかに進展するか」という仏道の根本問題に対する彼自身の体認であり、解答である。十七卷三十五品からなり、十地のうち初地と二地の一部を説くものである。

序品・・・十三の問答によって造論の理由を述べる。

- 第一の問答

「君は、菩薩十地のわけがらを説きたいというが、どのような因縁でそういうことをするのか」

「地獄、餓鬼、畜生、人、天、阿修羅の六界は、險悪であり恐怖に満ちている。生きとし生けるものすべてが生死の大海の中を押し流され、浮き沈みつしている。宿業がこの大海の波であり、憂い悲しみ苦しみ悩みが水であり、すすり泣く声、むせび泣く声、号泣する声、身をもだえて泣き叫ぶ声が波浪の音である。この大海は愚痴無明の闇に包まれ、煩惱の業風が吹きすさんで、海は荒れに荒れている。涙や汗や膿や血が溢れていて、悪臭が満ち、岸壁がそばだっている。この海に漂う衆生は恩愛に引きずられながら、しかもこの中に変らぬ愛があり、楽しみがあり、自己の所有があり、真実があると思ひこんでそれを求めてやまない。しかしいまだかつて一人もそれを得た者がいない。誰一人としてこの生死の大海を渡って彼岸に達した者もいない。もし自分でこの大海を渡りきる者が生まれ出たらば、彼はまた無量の衆生を渡すことができよう。このような人が誕生することを願って、十地のわけがらを解説するのである」

- 第十二の問答

「来生の程度や好むところがそれぞれ異なっていて同じでないというが、君が対象にしているのはどんな人か」

「私は、無上道心をおこした。そして一切の人を捨てず力に依じて、役立つことをしたいと思っている。けれども福德すぐれ、能力があって、ただこの『十地経』を聞いただけで深いわけがらを理解するような人たちには解釈の必要がない。私はこの人のためにこの論をつくるのではない」

● 第十三の問答

「どんな人を、福德すぐれ、能力のある人というのか」「仏語を聞いてよく自ら理解できる人のことをいうのだ。ちょうど健康な大人は、どんな苦い薬もそのまま飲みこむことができるが、しかし子どもには蜜で調合しないとこの薬は飲めない。このような福德すぐれた利根の人を仏教では善人という」

(善人はだいたい次の十のものを具えている。一には信、二には精進、三には念、四には定(禪定)、五には善身業(身の行い)、六には善口業(ことば)、七には善意業(心)、八は無貪、九は無恚、十は無痴である。)

「私はこのような善人は対象としていない。私が相手にしているのは鈍根解慢の人である。この人たちは経を読んでも、自分の力では内容が理解できない。この人たちにとって経のどこがむつかしいのかという、文が長いこと、難解な文字が多く読み難いこと、内容がわかりにくく説明がよくわからぬこと、このため何回読んでも理解できない。この人たちのために、毘婆沙をつくり、経の長い文を簡略にし、読みやすい文字にかえ、警えや例をひいて内容をわかりやすくし、歌やまとめを出してこの人たちの理解を助けたい。そのために、この論をつくるのである」

以上